

新刊紹介

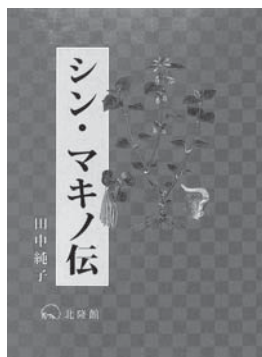
編集委員会

牧野富太郎を主人公とする NHK の「連続テレビ小説 らんまん」が 2023 年 4 月から 9 月まで放送され、筆者を含め多くの人に視聴された。期間平均視聴率は 15.6% で、視聴率 15% というのが「高視聴率番組」の 1 つのボーダーラインとなっているようなので、まあまあ観られたといえよう。

また、大型書店の店頭で、この番組に便乗したと言えそうな関連図書を数えてみたところ、30 冊を超えるものがあり驚きであった。

これらの書籍から今回取り上げる 3 冊の著者は、牧野が残した膨大な資料に直接アクセス出来たり、牧野が通った東京大学植物学教室の関係者などであるが、それぞれ牧野への評価や異なる側面を取り上げていて興味深い。

□『シン・マキノ伝』. 田中純子(著), B6 判. 280 頁. 2023 年 8 月 1 日. 北隆館. 東京. 1,300 円+税



まず著者の略歴をみてみよう。1964 年生まれ。上智大学大学院修士課程卒業（歴史学専攻）。東京の中等高等学校で教師となり、その後東京国立博物館資料館

で江戸から明治時代にかけての博物学的資料の整理および東京国立博物館所蔵博物図譜のデータベース作成に携わる。2010 年にリニューアルオープンした練馬区立牧野記念庭園記念館の学芸員となり現在に至る。牧野富太郎の生涯や研究業績を調査しその顕彰に努め、植物と関わったさまざまな人たちの展示を手掛ける。著書に「牧野植物図鑑原図集」（共著、北隆館、2020 年）、「牧野万葉植物図鑑」（共著、北隆館、2022 年）、「もっと知りたい牧野富太郎」（共著、東京美術、2023 年）などがある。

このように、牧野の多くの資料が手元にあり、記念館には富太郎のひ孫である牧野一淳氏が居るなど、牧野を身近に感じられる環境にある著者は牧野を語るに相応しいと言えよう。これまであまり研究されてなかった牧野の書簡の発掘と調査を行っている筆者であるが、本書には多くの知られざる牧野像も描かれていて興味深い。

高知新聞社は 2022 年 2 月に牧野博士を主人公モデルにした「朝ドラ」を製作するという NHK の発表があったことを受けて、史実に基づく「真実」の牧野富太郎を伝えるための新しい評伝を牧野の研究者である田中純子を起用し、2022 年 8 月から 2023 年 6 月まで高知新聞社のウェブサイト上に連載した。これを基に牧野関連の出版物を手掛けてきた北隆館からこの度出版されたものである。

□『牧野富太郎の植物学』. 田中伸幸 (著), 新書判. 240 頁. 2023 年 3 月 10 日. NHK 出版. 東京. 930 円+税



著者の略歴：
1971 年、東京都生まれ。東京都立大学大学院理学系研究科博士課程修了後、2001 年から高知県立牧野植物園研究・教育普及部研究員、標本室長、高知大学理

学部客員准教授などを経て、2015 年より国立科学博物館勤務、植物研究部陸上植物研究グループ長。また NHK 連続テレビ小説「らんまん」の植物監修者を務める。

牧野については、これまで牧野本人の書いた著作に加え、多くの著者により様々な角度から取り上げられ出版されてきたが、研究者としての業績はこれまで十分に顧みられてこなかった。筆者ははじめに次にように述べている。「本書は、牧野富太郎の人物像を考察するものではまったくない。牧野が専門とした学問分野はどういうものだったのか。研究者としての牧野の業績はどういうもので、どのような意味をもっていたのか。そして、それが現在にどのように影響を与えているのか。これらについて、自然科学の立場から考察するのが本書である」。

また、本書は、牧野富太郎についての評伝は数多く出版されているものの、植物学における業績をわかりやすく一般に向けて

書いたものは意外にないとした NHK 出版側からの執筆依頼に同感したことから執筆に至ったものである。

次に目次を紹介して本書の構成をみてみよう。第一章：植物分類学者・牧野富太郎、第二章：本草学から植物学へ、第三章：日本植物学と東京大学、第四章：標本採集の意義、第五章：新種を記載すること、第六章：『植物学雑誌』の刊行、第七章：記載された学名の数、第八章：植物図へのこだわり、第九章：教育者という選択、第十章：植物の知識を広める、第十一章：残された標本の行方、第十二章：これからの牧野富太郎へ。

著者は、高校時代から牧野図鑑に世話になり、東京都立大学牧野標本館で学位を取得し、高知県立牧野植物園で 10 年以上を過ごすなど、常に牧野の標本や蔵書などの資料に恵まれて研究できる環境にあった。本書において筆者は植物学者としての牧野の足跡を順を追って丹念に記述しているが、実績に対しては客観的かつ冷徹に、しかし一面では温かいまなざしを向けている。

□『牧野富太郎の植物愛』. 大場秀章 (著), 新書判. 200 頁. 2023 年 4 月 30 日. 朝日新聞出版. 東京. 810 円+税

著者の略歴を挙げると、1943 年、東京都生まれ。現在東京大学名誉教授・同大学総合研究博物館特招研究員、植物多様性・文化研究室代表。日本植物友の会会長。理学博士 (植物分類学専攻)。

主な著書：『江戸の植物学』(東京大学出版会)、『植物学と植物画』(八坂書房)、『ヒ



マラヤを越えた花々』(岩波書店)、『バラの誕生』(中公新書)、『植物学のたのしみ』(八坂書房)、『植物学とオランダ』(八坂書房)、『花の男シーボルト』(文春新書)、『花の肖像』(創土社)、『植物文化人物事典』(日外アソシエーツ)、『植物分類表』(第2刷)アボック社、など多くの植物学史や植物画など植物文化に関する著作がある。

本書の内容を俯瞰するため目次を見てみよう。

第1章 牧野富太郎の誕生 誕生日が諸説ある身上／天涯孤独の一人っ子／乳母の生家での原体験／「義校」名教館で深めた学び／『本草綱目啓蒙』との邂逅 etc.

第2章 植物学開眼 生物の「多様性」を発見／頼もしきは友なり／図解を重んじる植物学へ／若旦那初の上京／政治活動、そして再び植物へ／寝る間も惜しんで標本作り etc.

第3章 疾風怒濤の植物愛 郷里を捨て、岸屋を捨て／青長屋で三博士と出会う／矢田部宣言の明と暗／幻と消えたロシア行き／東京帝国大学助手に就く／池野成一郎の友情 etc.

第4章 比類なき富太郎の植物画 精神の融合としての画作／画作以前の植物愛／画作における独自の技術／完成度の高い植物画／サクラを描き、サクラで埋めよ etc.

第5章 植物愛が結実した出会い 植物の

愛好家たちとの交流／何百人もの生徒を得る植物博士／『植物学講義』発刊『植物研究雑誌』創刊 etc.

第6章 植物と心中する博士 父母におわびのよいみやげ／東京大学を退職する／「図鑑のマキノ」の膾炙／名付け親の植物愛／「植物の精」が残した物語 etc.

終章 姿が見えない真の牧野富太郎 『牧野富太郎自叙伝』は事実か否か／就拙な回想の理由／魅了された愛好家たち／博士を支えた博士たち etc.

筆者は牧野の生涯を時系列的に追っているが、世俗的なものと植物学に関するものとを上手く織り交ぜながら平易な文章で進めてゆく。「あとがき」での一文を紹介する。

「私は、牧野と同様に植物分類学の研究に従事しており、折々牧野が収集した標本や図書を利用させてもらっている。私にとって牧野は完全に過去の学者ではなく、今でも仲間内では「牧野さん」と呼ぶなど親密なつながりを有している。そんな私の目からすると従来の伝記などに書かれた牧野富太郎像には腑に落ちない部分が多く、いつか機会があったら訂正文を書いてみたいと思いつつ続けていた。それが図らずも今回一部実現することになった」。

それに当たると思われる一文が終章の／博士を支えた博士たち／に登場する。「自分の採集欲を充たすため、許可もなく他人の庭に入り込み植木の枝を大量に切り採ったり、採集会の余興に神社の狛犬に跨ったり、ほとんど根拠もなく他人を貶める文言を記したりするのは、一応は社会的ステータスを認められている学者のすることではあるまい」。

□『どこかにきつという 植物図鑑の絵を描きたいと思っている人に!』. 梅林正芳 (著), A5 判. 152 頁 (総頁). 2022 年 8 月 25 日. 南足柄市. ウッズプレス. 2,600 円+



税

本書の長い風変わりな書名には、筆者の思いが込められている。まず、「はじめに」の冒頭部分に本書を刊行する意味合いが述べられているの

で、少し長いが引用する。

「自然科学の分野に登場する、学術的な植物の絵があります。例えば、新種発表の論文に描かれた絵、植物相や分類群を研究した専門書の植物の絵など、分類学のなかで見ることが多いものですが、形態学や生態学にもよく現れます。一般のかたの目に触れるものとしては、市販の図鑑の絵があります。私は、このような絵を「植物図」と呼んでいます。図鑑の絵を思い浮かべていただければわかりますが、植物図は、「植物の形と構造を解説する」という、特殊ですが、大変わかりやすい目的を持っています。

植物図は、学術研究への貢献のみならず、一般向けの図鑑や事典類、ときには、博物館の展示などにも利用され、知識の普及にも貢献してきました。遺伝子研究が主流の現代にあっても、研究者や出版社にとって、なくてはならない情報伝達の方法であることはまちがいありません。ところが、このような植物図の描き手は、最大級の絶滅種

のような瀕死の状態となっています。後継者育成を試みたこともありますし、機会があるごとに、訴えてはきましたが効果は上がっていません。そこで、植物図の世界で生きてきた者の務めとして、今までに培ってきたことを、書物という形で残しておきたいと思うようになりました」。

このように著者の切実な思いが述べられた書籍であるが、本書の内容は一般市民を対象に行ってきた植物図描画講習会での授業内容や、各所で行なった講演内容をもとにしている。

著者の略歴を本書から引用する。

1976 年からフリーランスのボタニカルイラストレーターとして、学術雑誌、専門書、図鑑、事典・辞典類に植物図を描く。1992～2016 年金沢大学に文部技官、助教として在職。2010 年に第 18 回松下幸之助花の万博記念賞・記念奨励賞受賞。

目次は次のとおり

1 章 図鑑の絵について、2 章 観察の仕方、3 章 解説するための工夫、4 章 描画材料の選び方、5 章 標本からの描画、6 章 図面の構成、7 章 一枚の図ができるまで、8 章 描画の心構えと注意事項、9 章 植物図の発展性

植物図鑑の絵は、植物の形や構造を視覚的に解説することであり、そのためにはどのように描けばよいかを、辞典・事典や専門書に長く科学的な植物図を描いてきた著者が、豊富で高品質な図を交えながら説明している。

例えば、木本の枝を描いている図中で、一年枝と二年枝を分ける芽鱗痕がきちんと描かれている。また、図鑑の解説文の記述

を図中で具体的に如何に表現するか、分類学や生態学の知識も要求されるとしている。

本書の7章で取り上げているのは、新種発表論文のための図はどのように制作されたかを詳細に解説している。ここではカヤツリグサ科ホソガタホタルイ属の新雑種、カイナンカンガレイの図を発表者から依頼されている。依頼者から押し葉標本、液浸標本、参考資料として生時や花を分解したカラー写真、生態写真、発見者の観察記録などが提供され、全形と部分図を描くこととなる。筆者の気になったところの一部を紹介する。

全形図では、根のある地下部は固まっていたので70%アルコール液に浸けて柔らかくし、1本1本追跡できるようにする。茎や葉の平行線は曲線定規、普通の定規を使用し、この二つで描けないところはフリーハンドで描く。

部分図の作図は、すべて実体顕微鏡を使用する。花序と小穂は水に沈めて描き、茎の断面は煮戻しではつぶれていて復元できなかったもので、提供された写真と他の液浸の部分参考に描いた。小花は70%アルコールを入れたシャーレのなかで解剖するが、壊さないように行うには手先の器用さが要求される。花柱や柱頭の微突起は液浸では透明で見えないことがあるので注意が必要。同様に他の部位の液浸でも毛が透明になることがある。

これらは、図が完成するまでの多くの手順の一部に過ぎず、多くの工夫と苦勞の積み重ねが秘められている。

8章の「画の心構えと注意事項」を要約

する。

1. 形や構造の解説図を描いているということ意識する。
2. どんな小さな構造や形にも、何らかの生物学的意味があると思って観察する。
3. 第三者が見てもよくわかるように、親切的な気持ちを持って描く。
4. 描画前に形や構造がよくわかる視線を探す。
5. 線画の場合は、形がよくわかるように輪郭線を明確に描く。
6. 陰影はなるべく少なくしたほうが良い。
7. 描く前に、対象とする植物について図鑑などで調べる。
8. 写真利用については、あくまで参考に留める。
9. 押し葉標本を作っておく、萎れやすい部分は最初に作る。
10. 細部の描写と共に、全形にも配慮する。

おわりに、著者の本音が出ているところを引用する。

「一枚の図ができあがるまでに、押し葉標本からであれ、生植物からの描画であれ、形や構造をどのようにしたら、うまく伝達できるのかを考え工夫して描いています。典型的で特徴がよく現れている材料を選ぶために、たくさんの個体を見なければならぬし、花と果実を描くためには何度も足を運ぶ必要があります。あらためて、このような仕事であることを考えてみると、フリーランスでは厳しい仕事だなとつくづく思います。博物館や植物園に勤めておこなうべき仕事のように確信します」。

□『日本の高山植物』. 工藤岳 (著), 新書判. 253頁. 2022年9月30日. 光文社. 1,200円+税



著者の略歴を本書から引用する。

1962年東京生まれ。東京農工大学農学部林学科卒業、北海道大学大学院環境科学研究科博士課程修了。博士（環境科学）。現在、北海道大学

大学院地球環境科学研究所准教授。大学院生の時から30年以上、高山植物について研究を続けている。これまでの著書に『高山植物の自然史』（編著、北海道大学図書刊行会）、『大雪山のお花畑が語ること』（京都大学学術出版会）、『生物学者、地球に行く』（小林真とともに責任編集、文一総合出版）などがある。

目次：はじめに、第1章：高山植物という生き方、第2章：高嶺の花はなぜ美しい、第3章：お花畑ができる仕組み、第4章：高山植物のたどった道、第5章：消えゆくお花畑、おわりに。

北大の大雪山の高山植物研究の第一人者である工藤先生の著作である。通読して感ずるのは、わかり易く書かれていること、大雪山に何十年も通って得たエッセンスが詰め込まれていることなどであり、また大雪山と高山植物への思い入れが伝わってくる。

筆者なりに興味深かったところを挙げると、

*ハイマツ、イワウメ、アオノツガザクラなどは大きな株となって何百年も生きている、現在目にする高山植物たちは、もしかしたら氷河期が終わってから数万年もの間、生き延びてきた可能性がある。

*多くの高山植物は遺伝的多様性を保つため他殖にこだわっていて、厳しい自然環境の中で花粉を運んでくれる昆虫を呼び寄せるための進化をしている。

*多くの高山植物の受粉を支えているのはハエ類とハチ類であるが、重要なのはマルハナバチで最も多様な花を訪れる。例えば大雪山の高山帯では、4種類のマルハナバチが、約50種もの植物のもとを訪れる。その訪花習性に植物がうまく合わせている。

*高山生態系は風衝地と雪田とその連続帯の組み合わせでできている。

*アオノツガザクラの隠蔽的自家不和合性。

*早咲きのウラシマツツジやコメバツガザクラと越冬明けの女王バチの関係。

*まれに起こるエゾノツガザクラとアオノツガザクラの交雑で作られた雑種コエゾツガザクラが、子孫を残せない種子を作りながら、何百年も生き延びて広い面積を占め存在感を発揮している。

*雪解けの違いが作り出す多様で美しいお花畑は、高山植物の分布や季節性を作り出すだけでなく、利用できる資源が少ない高山環境で自然選択圧として他の生物に働きかけ、進化が繰り返されている。雪は高山生態系の多様性の創造者なのである。

*最終氷期に、氷床に被われていなかったベーリンジア地域と北海道とは、ほぼ地続

きだったと考えられている。ここからの高山植物の移動ルートには、東シベリアからサハリンを経由するルートと、カムチャツカ半島から千島列島を経由するルートがあった。それぞれのルートを旅した植物は北海道で合流し、津軽海峡を渡って本州へとさらに南下した。つまり北海道は、北方からの植物の玄関口になった。

＊最新の機器を用いた系統解析から日本の高山植物の起源が解かってきた。北海道を含む北日本に分布する高山植物は、最終氷期に渡ってきたと考えられ、高緯度地域にいる集団と遺伝的にも近い。一方で、異なる遺伝子タイプを持つ中部山岳地域の高山植物は、最終氷期以前に渡ってきた古い系統である可能性がある。

＊かつて同種とされていた高山植物が、系統解析で実際には別種だった例としてのヨツバシオガマは、東北以北から千島列島にかけて分布する大型の集団と、本州中部地

方に分布する小型の集団では、遺伝的に大きく違うことが判明した。現在、前者をエゾヨツバシオガマと呼び、中部地方のヨツバシオガマとは別種扱いにされている。

＊ハクサンコザクラやミチノクコザクラは、基本種エゾコザクラの変種とされてきた。しかし系統解析によると従来の定説と異なり、系統樹の基部に位置するのは本州のハクサンコザクラやミチノクコザクラであり、そこから北海道のエゾコザクラが派生し、さらに北方圏（カムチャツカ・アラスカ）に広がっていった可能性が示されている。

気候変動による高山植物への影響の大きさを様々な角度から考察していて、考えさせられる。また、本書を読むことで高山環境について多くの新たな知見が得られ、今後高山帯を訪れた時の観察に生かしてみたいくなる。

(吉中)

会員が撮影した湿原・湿地⑥

撮影：佐々木 純一



バイカモ 大雪山系ワサビ沼
2020.7.25